

# 心身一如

万病息災への旅

10

前回、脳には三つの脳がある話をしました。その三つの中で、他の動物と同じ爬虫類脳と旧哺乳類脳を古脳といひ、人は誕生と同時にこの古脳をフル活用し社会生活に適応していきます。

ここで話を代謝に戻し、誕生後すぐにお乳を吸ったたり握ったりする反射が生きるために外部の材や、本能を頼りに手探りながら成長し、生後1カ月には学習を開始、1歳を過ぎたところから早くも知能の芽生えともいえる洞察や推理など経験に基づいた行動を開始します。

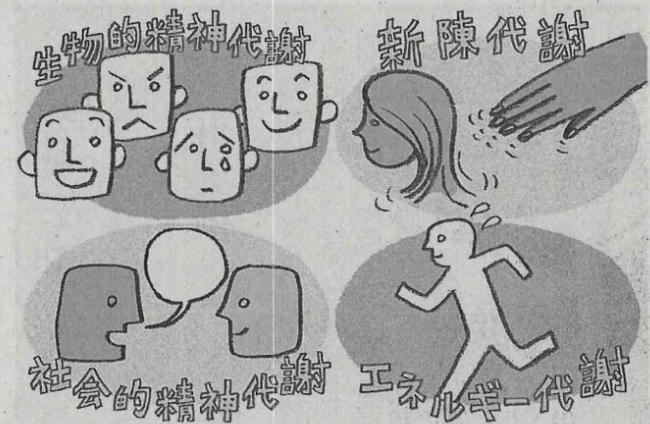


イラスト 山本重也

## それぞれの調和が鍵

### 心身四つの代謝

成長とともに徐々に古脳いいいます。皆さんが存から人間性を生み出す大脳の代謝には新陳代謝と脳新皮質という新脳へ、エネルギー代謝があることその中心を移していきま。髪の毛、爪、どの各組織を動かすのが、反射や本能は乳児期 お肌、筋肉、骨、血液、エネルギー代謝です。脳は体の一部としてこに役割を終えますが、古ホルモンなどは毎日古い脳自体は新脳にバトンタ細胞から新しい細胞に無の代謝の一部に組み込ま

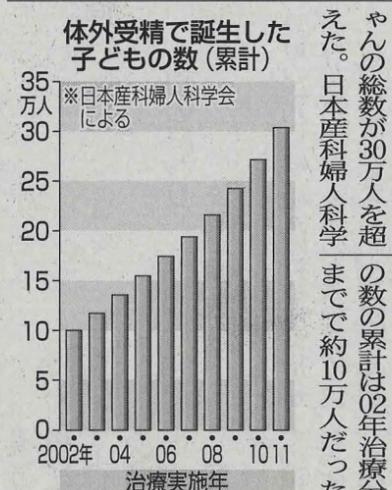
意識のうちに生まれ変わっています。く、生きる目的が本能より精神の成就にあるの、既存の身体中心の代、謝から精神代謝を独立させ、生かす必要があります。ビタミン外来では精神

していただくために精神代謝をこれまでの新陳代謝とエネルギー代謝に相応するよう二つに分けて説明しています。

つまり精神代謝のうち新陳代謝に相当するものが、喜怒哀楽など古脳から生み出される代謝で「生物的精神代謝」と呼んでいます。さらにエネルギー代謝に匹敵するものが、言葉や情報を材料とし新脳を働かせ、思考し創造し自分の言葉で外部とコミュニケーションを取る代謝で「社会的精神代謝」と呼んでいます。

## 体外受精 30万人超誕生

83年以降 産婦人科学会が発表



国内で行われた体外受精によって生まれた赤ちゃんの総数が30万人を超えた。日本産科婦人科学会が2011年分の治療実績を加えた最新の集計を明らかにした。

国内初の赤ちゃんは1983年に東北大病院で生まれた。同学会は、体外受精を手掛けている医療機関に対し、学会への施設登録と治療実績の報告を求めている。

集計によると、11年には全国551施設で計約27万7千の体外受精が行われ、その結果、3万2千426人の赤ちゃんが生まれた。国内の体外受精で誕生した子どもの累計はこれで30万3千806人となった。

体外受精による出生は年々増えており、子どもの数の累計は02年治療分までで約10万人だった。

11年に治療を受けた女性の出生は多くが12年になるため、12年の全出生数(約103万7千人)に占める割合を見ると3.1%。ほぼ32人に1人が体外受精によって生まれていることになる。

### 月曜掲載



渡辺賢治氏

漢方薬は約150種、業界団体の調査によると、日常診療で漢方薬を使用している医師(眼科、美容外科など)一部の診療科を除くは約9割に上る。10年末時点の医師数(約20万5千人)に単純に当てはめると、全国で26万人以上が漢方薬を処方している計算だが、日本東洋医学会が認定した漢方専門医師は2千人余り。大半は専門的な知識がないまま、西洋医学の薬の代用としてわずかな漢方薬を使っているのが実態」と研究代表の渡辺賢治(慶応大教授、内科と漢方が専門)は話す。

漢方は、患者の症状だけでなく体質にも着目し、「証」と呼ばれるその人

者が自分の自覚症状や体質を、タブレット端末などのタッチパネル式画面で入力する「問診システム」を製作した。

患者は画面に表示される「イラストする「暑がり」など数百項目の質問や選択肢への答えを入力。漢方専門医師による診断結果と照合することで、適切な診断につながる問診項目を絞り込んでいった。データの集積は10年にまず慶応大でスタート。その後、富山大、千葉大など計7施設に広げ、最終的に患者約6200人分、約3万5千件のデータを集め、148の問診項目を選び出した。

その結果、証の一部については、日本の漢方を含むアジアの伝統医学の診断項目が、西洋医学以外で初めて取り入れられる予定になっていることだ。

漢方は、ルーツは中国だが日本で独自に発展した。「その結果、中国や韓国の伝統医学と違い、西洋医学は子どもや高齢者に使いやすくなりそうだ。」

### 初の無音型MRI発売

GEヘルスケア

現在、健康保険で使える漢方薬は約150種、業界団体の調査によると、日常診療で漢方薬を使用している医師(眼科、美容外科など)一部の診療科を除くは約9割に上る。10年末時点の医師数(約20万5千人)に単純に当てはめると、全国で26万人以上が漢方薬を処方している計算だが、日本東洋医学会が認定した漢方専門医師は2千人余り。大半は専門的な知識がないまま、西洋医学の薬の代用としてわずかな漢方薬を使っているのが実態」と研究代表の渡辺賢治(慶応大教授、内科と漢方が専門)は話す。

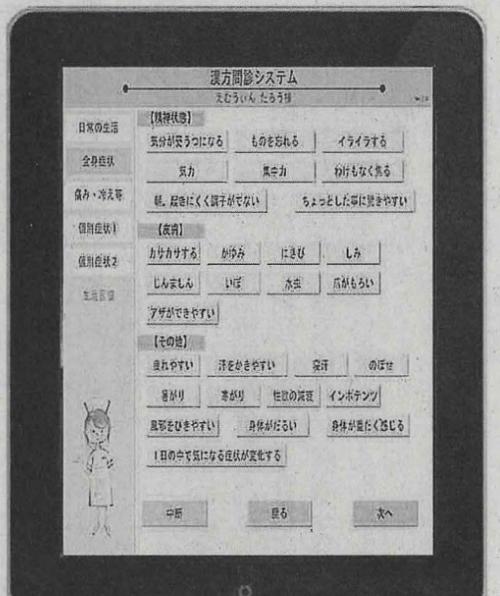
漢方は、患者の症状だけでなく体質にも着目し、「証」と呼ばれるその人

強い磁気を利用して、体内の臓器や血管などを撮影する磁気共鳴画像装置(MRI)は検査中、激しい騒音を伴うことが避けられなかったが、音のしない静かな機種が初めて登場した。発売したのはGEヘルスケア・ジャパン。新技術は「サイレント・スキャン」と呼ばれ、磁場を作る電流の流れ方やデータ収集法を従来と大幅に変えたという。今のところ撮影対象は頭部のみ。

これまでのMRIは、トンネルのような筒の中に入り、検査中は「カン、カン、カン、カン」といった工事現場にいるような大きな騒音が長時間続いた。新機種は子どもや高齢者に使いやすくなりそうだ。

# 漢方治療にIT活用

## 「問診システム」開発 症例を分析質問絞り込む



漢方問診システムは、患者の自覚症状や体質などをタブレット端末の画面で入力する。漢方専門医師による診断結果と照合することで、適切な診断につながる問診項目を絞り込んでいった。データの集積は10年にまず慶応大でスタート。その後、富山大、千葉大など計7施設に広げ、最終的に患者約6200人分、約3万5千件のデータを集め、148の問診項目を選び出した。

その結果、証の一部については、日本の漢方を含むアジアの伝統医学の診断項目が、西洋医学以外で初めて取り入れられる予定になっていることだ。

漢方は、ルーツは中国だが日本で独自に発展した。「その結果、中国や韓国の伝統医学と違い、西洋医学は子どもや高齢者に使いやすくなりそうだ。」

# 医療 新世紀